狐憑

中島敦

青空文庫

ネウリ部落のシャクに憑きものがしたといふ評判である。色々なものが此の男にのり移るのださうだ。鷹だの狼だの獺だのの靈が哀れなシャクにのり移つて、不思議な言葉を吐かせるといふことである。

後に希臘人がスキュティア人と呼んだ未開の人種の中でも、この種族は特に一風變つてゐる。彼等は湖上に家を建てて住む。野獣の襲撃を避ける爲である。數千本の丸太を湖の淺い部分に打込んで、其の上に板を渡し、其處に彼等の家々は立つてゐる。床の所々に作られた落し戸を開け、籠を吊して彼等は湖の魚を捕る。獨木舟を操り、水狸や獺を捕へる。麻布の製法を知つてゐて、獸皮と共に之を身にまとふ。馬肉、羊肉、木苺、菱の實等を喰ひ、馬乳や馬乳酒を嗜む。牝馬の腹に獸骨の管を插入れ、奴隷に之を吹かせて乳を垂下らせる古來の奇法が傳へられてゐる。

ネウリ部落のシャクは、斯うした湖上民の最も平凡な一人であつた。

シャクが變になり始めたのは、去年の春、弟のデックが死んで以來のことである。その時は、北方から剽悍な遊牧民ウグリ族の一隊が、馬上に偃月刀を振りかざして疾風の如くに此の部落を襲うて來た。湖上の民は必死になつて禦いだ。初めは湖畔に出て侵略者を迎へ擊つた彼等も名だたる北方草原の騎馬兵に當りかねて、湖上の栖處に退いた。湖岸との間の橋桁を撤して、家々の窓を銃眼に、投石器や弓矢で應戰した。獨木舟を操るに巧みでない遊牧民は、湖上の村

の殲滅を斷念し、湖畔に殘された家畜を奪つただけで、又、疾風の樣に北方に歸つて行つた。後には、血に染んだ湖畔の土の上に、頭と右手との無い屍體ばかりが幾つか殘されてゐた。頭と右手だけは、侵略者が斬取つて持つて歸つて了つた。頭蓋骨は、その外側を鍍金して髑髏杯を作るため、右手は、爪をつけたまま皮を剥いで手袋とするためである。シャクの弟のデックの屍體もさうした辱しめを受けて打捨てられてゐた。顏が無いので、服裝と持物とによつて見分ける外はないのだが、革帶の目印と鉞の飾とによつて紛れもない弟の屍體をたづね出した時、シャクは暫く茫つとしたまま其の慘めな姿を眺めてゐた。其の樣子が、どうも、弟の死を悼んでゐるのとは何處か違ふやうに見えた、と、後でさう言つてゐた者がある。

その後間もなくシャクは妙な譫言をいふやうになつた。何が此の男にのり移つて奇怪な言葉を吐かせるのか、初め近處の人々には判らなかつた。言葉つきから判斷すれば、それは生きながら皮を剥がれた野獸の靈ででもあるやうに思はれる。一同が考へた末、それは、蠻人に斬取られた彼の弟デックの右手がしやべつてゐるのに違ひないといふ結論に達した。四五日すると、シャクは又別の靈の言葉を語り出した。今度は、それが何の靈であるか、直ぐに判つた。武運拙く戰場に斃れた顚末から、死後、虛空の大靈に頸筋を掴まれ無限の闇黒の彼方へ投げやられる次第を哀しげに語るのは、明らかに弟デック其の人と、誰もが合點した。シャクが弟の屍體の傍に茫然と立つてゐた時、祕かにデックの魂が兄の中に忍び入つたのだと人々は考へた。

さて、それ迄は、彼の最も親しい肉親、及び其の右手のこととて、彼にのり移るのも不思議

はなかつたが、其の後一時平靜に復つたシャクが再び譫言を吐き始めた時、人々は驚いた。今度は凡そシャクと關係のない動物や人間共の言葉だつたからである。

今迄にも憑きもののした男や女はあつたが、斯んなに種々雜多なものが一人の人間にのり移つた例はない。或時は、此の部落の下の湖を泳ぎ廻る鯉がシャクの口を假りて、鱗族達の生活の哀しさと樂しさとを語つた。或時は、トオラス山の隼が、湖と草原と山脈と、又その向ふの鏡の如き湖との雄大な眺望について語つた。草原の牝狼が、白けた冬の月の下で飢に惱みながら一晩中凍てた土の上を歩き廻る辛さを語ることもある。

人々は珍しがつてシャクの譫言を聞きに來た。をかしいのは、シャクの方でも（或ひは、シャクに宿る靈共の方でも）多くの聞き手を期待するやうになつたことである。シャクの聽衆は次第にふえて行つたが、或時彼等の一人が斯んなことを言つた。シャクの言葉は、憑きものがしやべつてゐるのではないぞ、あれはシャクが考へてしやべつてゐるのではないかと。

成程、さう言へば、普通憑きもののした人間は、もつと恍惚とした忘我の狀態でしやべるものである。シャクの態度には餘り狂氣じみた所がないし、其の話は條理が立ち過ぎてゐる。少し變だぞ、といふ者がふえて來た。

シャク自身にしても、自分の近頃してゐる事柄の意味を知つてはゐない。勿論、普通の所謂憑きものと違ふらしいことは、シャクも氣がついてゐる。しかし、何故自分は斯んな奇妙な仕草を幾月にも亙つて續けて、猶、倦まないのか、自分でも解らぬ故、やはり之は一種の憑きも

のの所爲と考へていいのではないかと思つてゐる。初めは確かに、弟の死を悲しみ、其の首や手の行方を憤ろしく思ひ晝いてゐる中に、つい、妙なことを口走つて了つたのだ。之は彼の作爲でないと言へる。しかし、之が元來空想的な傾向を有つシャクに、自己の想像を以て自分以外のものに乘り移ることの面白さを教へた。次第に聽衆が增し、彼等の表情が、自分の物語の一弛一張につれて、或ひは安堵の・或ひは恐怖の・僞ならぬ色を浮べるのを見るにつけ、此の面白さは抑へ切れぬものとなつた。空想物語の構成は日を逐うて巧みになる。想像による情景描寫は益々生彩を加へて來る。自分でも意外な位、色々な場面が鮮かに且つ微細に、想像の中に浮び上つて來るのである。彼は驚きながら、やはり之は何か或る憑きものが自分に憑いてゐるのだと思はない譯に行かない。但し、斯うして次から次へと故知らず生み出されて來る言葉共を後々迄も傳へるべき文字といふ道具があつてもいい筈だといふことに、彼は未だ思ひ到らない。今、自分の演じてゐる役割が、後世どんな名前で呼ばれるかといふことも、勿論知る筈がない。

　シャクの物語がどうやら彼の作爲らしいと思はれ出してからも、聽衆は決して減らなかつた。却つて彼に向つて次々に新しい話を作ることを求めた。それがシャクの作り話だとしても、生來凡庸なあのシャクに、あんな素晴らしい話を作らせるものは確かに憑きものに違ひないと、彼等も亦作者自身と同樣の考へ方をした。憑きもののしてゐない彼等には、實際に見もしない事柄に就いて、あんなに詳しく述べることなど、思ひも寄らぬからである。湖畔の岩陰や、近

くの森の樅の木の下や、或ひは、山羊の皮をぶら下げたシャクの家の戸口の所などで、彼等はシャクを半圓にとり圍んで座りながら、彼の話を樂しんだ。北方の山地に住む三十人の剽盜の話や、森の夜の怪物の話や、草原の若い牡牛の話などを。

若い者達がシャクの話に聞き惚れて仕事を怠るのを見て、部落の長老連が苦い顏をした。彼等の一人が言つた。シャクのやうな男が出たのは不吉の兆である。もし憑きものだとすれば、斯んな奇妙な憑きものは前代未聞だし、もし憑きものでないとすれば、斯んな途方もない出鱈目を次から次へと思ひつく氣違ひは未だ曾て見たことがない。いづれにしても、こんな奴が飛出したことは、何か自然に悖る不吉なことだと。此の長老が偶々、家の印として豹の爪を有つ・最も有力な家柄の者だつたので、この老人の説は全長老の支持する所となつた。彼等は祕かにシャクの排斥を企んだ。

シャクの物語は、周圍の人間社會に材料を採ることが次第に多くなつた。何時迄も鷹や牡牛の話では聽衆が滿足しなくなつて來たからである。シャクは、美しく若い男女の物語や、吝嗇で嫉妬深い老婆の話や、他人には威張つてゐても老妻にだけは頭の上がらぬ酋長の話をするやうになつた。脫毛期の禿鷹の樣な頭をしてゐるくせに若い者と美しい娘を張合つて慘めに敗れた老人の話をした時、聽衆がドツと笑つた。餘り笑ふので其の譯を訊ねると、シャクの排斥を發議した例の長老が最近それと同じ樣な慘めな經驗をしたといふ評判だからだ、と言つた。

長老は愈々腹を立てた。白蛇のやうな奸智を絞つて、彼は計をめぐらした。最近に妻を寢取

られた一人の男が此の企に加はつた。シャクが自分にあてこする様な話をしたと信じたからである。二人は百方手を盡くして、シャクが常に部落民としての義務を怠つてゐることに、みんなの注意を向けようとした。シャクは釣をしない。シャクは馬の世話をしない。シャクは森の木を伐らない。獺の皮を剥がない。ずつと以前、北の山々から鋭い風が鵝毛の様な雪片を運んで來て以來、誰か、シャクが村の仕事をするのを見た者があるか？

人々は、成程さうだと思つた。實際、シャクは何もしなかつたから。冬籠りに必要な品々を頒け合ふ時になつて、人々は特に、はつきりと、それを感じた。最も熱心なシャクの聞き手までが。それでも、人々はシャクの話の面白さに惹かれてゐたので、働かないシャクにも不承無承冬の食物を頒け與へた。

厚い毛皮の陰に北風を避け、獸糞や枯木を燃した石の爐の傍で馬乳酒を啜りながら、彼等は冬を越す。岸の蘆が芽ぐみ始めると、彼等は再び外へ出て働き出した。

シャクも野に出たが、何か眼の光も鈍く、呆けたやうに見える。人々は、彼が最早物語をしなくなつたのに氣が付いた。強ひて話を求めても、以前したことのある話の蒸し返ししか出來ない。いや、それさへ滿足には話せない。言葉つきもすつかり生彩を失つて了つた。人々は言つた。シャクの憑きものが落ちたと。多くの物語をシャクに語らせた憑きものが、最早、明らかに落ちたのである。

憑きものは落ちたが、以前の勤勉の習慣は戻つて來なかつた。働きもせず、さりとて、物語

をするでもなく、シャクは毎日ぼんやり湖を眺めて暮らした。其の様子を見る度に、以前の物語の聽手達は、この莫迦面の怠け者に、貴い自分達の冬籠りの食物を頒けてやつたことを腹立たしく思出した。シャクに含む所のある長老達は北叟笑んだ。部落にとつて有害無用と一同から認められた者は、協議の上で之を處分することが出來るのである。

硬玉の頸飾を著けた鬚深い有力者達が、より〳〵相談をした。身内の無いシャクの爲に辯じようとする者は一人も無い。

丁度雷雨季がやつて來た。彼等は雷鳴を最も忌み恐れる。それは、天なる一眼の巨人の怒れる呪ひの聲である。一度此の聲が轟くと、彼等は一切の仕事を止めて謹愼し、惡しき氣を祓わねばならぬ。奸譎な老人は、占卜者を牛角杯二箇で以て買收し、不吉なシャクの存在と、最近の頻繁な雷鳴とを結び付けることに成功した。人々は次の樣に決めた。某日、太陽が湖心の眞上を過ぎてから西岸の山毛欅の大樹の梢にかかる迄の間に、三度以上雷鳴が轟いたなら、シャクは、翌日、祖先傳來のしきたりに從つて處分されるであらう。

其の日の午後、或者は四度雷鳴を聞いた。或者は五度聞いたと言つた。

次の日の夕方、湖畔の焚火を圍んで盛んな饗宴が開かれた。大鍋の中では、羊や馬の肉に交つて、哀れなシャクの肉もふつ〳〵煮えてゐた。食物の餘り豐かでない此の地方の住民にとつて、病氣で斃れた者の外、凡ての新しい屍體は當然食用に供せられるのである。シャクの最も熱心な聽手だつた縮れつ毛の青年が、焚火に顏を火照らせながらシャクの肩の肉を頬張つた。

例の長老が、憎い仇の大腿骨を右手に、骨に付いた肉を旨さうにしやぶつた。しやぶり終つてから骨を遠くへ抛(はふ)ると、水音がし、骨は湖に沈んで行つた。

ホメロスと呼ばれた盲人(めくら)のマエオニデェスが、あの美しい歌どもを唱ひ出すよりずつと以前に、斯うして一人の詩人が喰はれて了つたことを、誰も知らない。

青空文庫情報

底本：「中島敦全集　第一巻」筑摩書房
　　1976（昭和51）年3月15日発行
入力：圭
校正：木本敦子
1999年9月3日公開
2004年2月4日公開
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狐憑

中島敦

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/